

有限会社 オショールランド
[ミキシング・エンジニア]

Noriyasu Yamadera 山寺 紀康

- 1959年生まれ
- 神奈川県出身
- 日本大学芸術学部卒業
- 在学中81年に浜田省吾ツアー・ローディーを経験、彼を担当する(有)GYNEに入社、PAに。90年からフリーランスで活動。



「取り戻すことができない
時間への意識は大事です」

音楽&メカ好き少年は、初めて行ったコンサートで知った「天職」に就いた。その日、その時、その場かぎりのコンサート、PAエンジニアはやり直しのできない音を作り出す。開演前までの時間や小さなことの大切さ、感じることの大切さを胸に刻んで…。

レコーディング・エンジニアやPAの方には、オーディオをはじめ電気や機械に興味を持っていたという人が多い。現在PAエンジニアとして活躍し、スガシカオさんの武道館公演を終えて一息…という時にお会いした山寺紀康さん（愛称はオシヨールさん、由来



は名字からです)も、中学生の時にその当時あまりなかったフェーダー付きミキサーを自分で作ったほどのメカ好き少年だったという。

「初めて行ったコンサートはアマチュア・ロック・フェスティバルというのだったんですが、真ん中の一番いい席で機械組んでいるのを見て(笑)、

かっこいい、あれがやりたいな、と思っただけです」

会場の大きい小さいに関係なく、目標は同じ

音楽好き、メカ好きな山寺さんは、「天職!」と思っただけ。

大学が放送学部だったこともあり、二年生の時には深夜放送「セイヤング」のADのバイト。その時に浜田省

も良くないと、ミュージシャンも気持ち良くなれないですから」

吾さんと知り合い、PAを希望していることを話したことから大学四年の年、学校に籍を置いたまま彼のローディーとしてコンサート・ツアーに参加、半年後PAに移り年間百二十本を回った。もちろん最初はステージ周り、そしてモニター・ミキサーの順である。

モニター・ミキサー専任で五、六年やった後、友人仲間ですらライヴ・ハウスのステージでハウス・ミキサーをやったという『既成事実』を作り、山本達彦さんのツアー中にハウスのポジションを突然振られ「いいんですか!」と飛び付いた。仕事はすべて、誰が教えてくれるものでもなく見て覚えていくもの。チャンスを引き寄せることになったのだ。ハウス・ミキサーに昇格してから久保田利伸さん等々のステージを手掛けた後、フリーランスで活動するようになった。

「モニターを専門職としてやっている人もいます。ミュージシャンとダイレクトじゃないですか。ミュージシャンが気持ちよく歌ったり演奏したりできるかどうか:それ次第でコンサートが決まってしまうくらい重要なんです。ミュージシャンの表情を見てその気持ちを読む。そしてステージで出す音によって、客席で出す音がどれほど影響されるかを知るわけです。外で出す音

「一つのものを作ろうとしたらリハールに通って、きっちり音楽を把握した上で音を作る:僕はそういうふうにしたいんです。音楽を知っているのとそうでないとは全然違うし、ミュージシャンとのコミュニケーションの面

は特に大きいです」

ハウス・ミキサーになってから十二年余り。小さなライヴ・ハウスなどは、いまだにハウスとモニターを兼ねてやることになる。

「会場の大きい小さいは関係ないです。一体感を作るっていう目標は同じですから。でもコンサートの規模が大きくなれば関わる人の数も増える。人が多くなればそれだけ感性もいろいろある

小さなことが実はとても大切だつてことに気づくはず

音楽をたくさん聴いてきたこととはとも役立っているという。どんな仕事、どんな要求が無い込んできても対処しなければならぬ。それに備えた知識の吸収は不可欠だ。コンサートにもよく行く。

「どうしたつて(PAの)耳で聴いちゃうんですよね。人のコンサートだと不思議なくらい客観的に音が聴こえる(笑)。自分でやっていると、照明まで含めてステージ全体が客観的によく見えている時はいい状態で、やたらフェーダー動かしている時はだいたい

わけて、それを一致させる難しさもでてきます。人が集まれば上下関係も生まれるし、そうした人間関係からストレスも生まれる。難しいですよ。ミュージシャンが気持ちよく演奏でき、舞台監督、照明、モニターもハウスも、観客も関係者も満足できる……難しいけど、でもできるんです。ですから、いつもそれを信じてやっていると」

うまくいってない時。定まってる証明なんです。よかつた理由、だめだった理由を、一回一回考えてます。それに自分の癖、いいところ悪いところ……、そんなことを仕事がなくとも毎日考えてますね。僕はもともと才能あるとも優れた感性を持っているとも思っていないんですが、好きこそものの上手なれ、ということですね(笑)」

その日その場かぎりのライヴの音を作る。たとえ形として残らなくとも、人々の記憶には印象として残る。事実、音は消えてしまいが自分の仕事と

なれば、それを顧みずに進歩はありえない。

「だから山寺さんは考えるのだ。それに、今後は？」と訊けば答は、「ミキシングが上手になりたいです」。これは、ずつと変わらない気持ち。

これからPAを始める人へ。

「PAを始めて最初は、機材を積んだり降ろしたり倉庫での作業など、ぜんぜん違うことをやっていて何だろう？ と思うわけです。でもね、機材を落として壊れたらコンサートが中止になる恐れだつてあるし、車の運転も機材を積んでるんだと思えば乱暴なこととはできないし、はんだ付けの一つが致命傷になることだつてある。そのうちハウスでやるようになる、小さなことが実はとても大切だつてことに気づくはず。それに時間。ライヴはその日一日だけで、開演時間は決まっている。取り戻すことができない時間への意識は大事です。そういう作業とともに、音楽を聴くこと、気持ちいいことを知ること。例えばおいしいもの食べて「おいしい！」と感じる気持ちを大事にしてください」